患者社会復帰の味方

県内300人勤務「医療ソーシャルワーカー」

心のサポート　リハビリ相談　病院間の連携

早期支援へ認知度課題

医療機関などで社会福祉の立場から患者を支える医療ソーシャルワーカー（MSW）の重要度と存在感が増している。本県では約300人（2019年時点）が勤務し社会復帰を助けている一方、患者となってから初めて知られる存在で、いち早い支援につなげるため認知度向上が課題となっている。退院支援に業務内容が偏っているとの指摘も。在宅医療など患者のニーズは多様化しており、関係機関を中心にスキルアップを図っている。

回復期の患者を受け入れる雫石町七ツ森のいわてリハビリテーションセンター。MSWとして12年目の青山美音さん(35)が看護やリハビリ記録の確認、入院患者のサポート計画作成などに打ち込む。「落ち込んでいないか」と気を配る日々だ。

医師や看護師、理学療法士の「症状への対処」とは異なり、患者やその家族と面談して多様なニーズに寄り添う。交通事故などで障害が残る人もおり、青山さんは「何かができなくなっても、元の能力を生かし、何ができるか一緒に考えていく」と心得を語る。

以前と同じように暮らせるか、働けるか…。患者の家族構成、年齢によって悩みは異なる。MSWはそんなときに補助制度、退院後のサービス体制などの相談に応じる専門職だ。

ほとんどが社会福祉士の資格を持ち、入院機能がある病院の多くが配置。ただ、施設によって「医療相談員」「医療社会事業士」などと職名が異なり認知されにくい実態も。退院支援が診療報酬点数で評価されるようになったことで業務の偏りも指摘される中、MSWへの相談が早いほど的確な支援に結び付くケースが少なくない。

盛岡市中野の就労継続支援B型事業所の生活学舎アダージョでは、アルコール依存症が原因で後遺症のある利用者がいたが、飲酒をやめられず体調が悪化。再度の入院治療を拒んでいたもののMSWへの相談を機に入院が実現した。

「専門的見地から治療が大切と言ってくれて助かった」と感謝する堀間幸子施設長(72)。このケースのように、退院後に地域に戻ってから症状が悪化する人もおり「MSWと地域の連携がさらに密になれば」と期待を寄せる。

身寄りのない人や一つの医療機関では完結できない問題もあり、関係機関と組んだ地域ぐるみの支援体制も不可欠。慢性の病気や在宅医療を受ける患者は増え、県医療ソーシャルワーカー協会（会員102人）はMSW向け研修会を月1回開き、専門性の担保とスキルアップに努めている。

小泉進会長(39)は「県内のどこにいても質の高いMSWに出会えるようにしたい。患者にとって一番いい状況をかなえたいと思い続けている」と個々に合った支援の在り方を模索する。

入院患者の支援経過を確認し、今後の方針を上司や同僚と相談する青山美音さん（左）＝雫石町七ツ森・いわてリハビリテーションセンター

遠慮なく頼ることが大切

県立大社会福祉学部の伊藤隆博准教授（医療ソーシャルワーク）の話　病気の状態や治療経過の中で起こる生活上の課題に加え、自宅に戻る、復職するなど患者ごとのゴールに寄り添い、生活の再構築へ向けた支援を行うMSWの存在意義は大きい。病院の連携窓口としての役割も担い、MSW同士で転院の相談を行い支援のバトンも渡せる。病院機能の分化により、一つの医療機関の入院日数は限られている。退院援助の比重が大きくなっている現状もある中、どのように支援の質を担保していくかが重要だ。元の生活に戻るのに支障を来すような病気やけがをした場合は、遠慮なく頼ることが大切だ。

遠慮なく頼ることが大切

県立大社会福祉学部の伊藤隆博准教授（医療ソーシャルワーク）の話　病気の状態や治療経過の中で起こる生活上の課題に加え、自宅に戻る、復職するなど患者ごとのゴールに寄り添い、生活の再構築へ向けた支援を行うMSWの存在意義は大きい。病院の連携窓口としての役割も担い、MSW同士で転院の相談を行い支援のバトンも渡せる。病院機能の分化により、一つの医療機関の入院日数は限られている。退院援助の比重が大きくなっている現状もある中、どのように支援の質を担保していくかが重要だ。元の生活に戻るのに支障を来すような病気やけがをした場合は、遠慮なく頼ることが大切だ。